

## パナマとパナマコーヒーの歴史（概観）

旦部 幸博 （滋賀医科大学・学内講師）

- ▶ パナマは、中米でもっとも南アメリカ大陸の近くに位置し、パナマ地峡を形成している。西はコスタリカ、東は南アメリカ大陸のコロンビアに接する。コーヒーの栽培は、コスタリカ国境に近いパナマの最高峰ボルカン・バル山（3474m）を臨む、西部のリチキ県ボケテ区を中心に行われている。
- 先コロンブス時代、紀元前 1300 年以前のもと考えられる土器がパナマ中部から出土しており、この時代には既に先住民が存在した。オルメカ、マヤ、アステカなどのメソアメリカ文明に見られるような大規模な遺跡文明はなかったが、金製品や彩色土器などがパナマ中部や、西部のチリキ県で出土しており、これらを使用する先住民文化は存在していた。
  - コロンブスの新大陸発見（1492 年）後、パナマにもスペイン人が到達し、植民地化する。当初は先住民から金製品を収奪していたが、やがてパナマシティが設立される(1519 年)と、ここがスペイン本国との船の拠点になり 16～17 世紀に繁栄した。
  - 17～18 世紀には、イギリス海賊によるスペイン植民地襲撃（スペインとイギリスは植民地覇権を巡って対立しており、イギリス王室は海賊行為を黙認していた）が激化。1671 年、英海賊ヘンリー・モーガンによるパナマシティの焼き討ち事件などが発生。ボケテの南に位置するチリキ県の太平洋沿岸部もたびたびイギリス海賊や、その息が掛かったミスキート族による襲撃に見舞われた。
    - この頃、ヨーロッパでのコーヒー飲用が本格化したのに伴い、オランダ植民地（ジャワ）やフランス植民地（サンドマング）でのコーヒー栽培が始まり、18 世紀後半には、モカを凌ぐ産地となる。グアテマラ、コスタリカ、メキシコなど中米にも 18 世紀後半にコーヒーが伝わった。
  - 18 世紀終わりのフランス革命(1789 年)、19 世紀初頭のナポレオンによるスペインやポルトガルとの戦争によって、19 世紀にはラテンアメリカの植民地支配体制が大きく揺らぎ、相次いで独立を果たす。パナマもこの流れに取り込まれ、南アメリカ諸国と共にスペインから独立。当初、大コロンビアやヌエバ・グラナダ共和国として、コロンビアの一部に含まれていた。
    - コーヒーの大産地であったサンドマングはハイチとして独立（1791-1804）し、生産が衰退。他植民地でも奴隷解放運動により生産力が低下する。代わりに 19 世紀半ばには、入植者による労働形態に移行できたブラジルやコスタリカが台頭、これらはさらに、19 世紀後半の東南アジアでのコーヒーさび病の流行を背景に隆盛する。

- 19 世紀半ば、カリフォルニアで金が発見されたことからゴールドラッシュが巻き起こる。アメリカ東部の人は、大陸横断や南アメリカ南端を回る海路などさまざまなルートで西海岸を目指したが、その中でパナマ地峡を横断し、太平洋側からカリフォルニアに向かう船を待つ比較的安全なルートが開拓された。パナマの太平洋側に抜けた人々は、船を待つ間に付近を探索するうち、チリキ県の豊かな自然と肥沃な土地に触れた。それらの人々の中から、チリキでの農業に取り組む者も現れた。
  - 19 世紀末にはそれらの中からさらに北上して、ボケテ地方への定住者も現れた（一度目の移住ラッシュ）。現在、ドンパチ農園を運営するセラシン一家も、この頃にイタリアから移住し、1873 年にはボケテ地方のややボルカン寄りに位置する場所（現在のカジェホンセコ）を開墾したという。1895 年には、アメリカ人 J.R.トーマスが、カリフォルニアからアルト・リノに定住して、コーヒー農園「Finca Santa Maria」を経営し、シカゴの会社「Boquete Coffee & Commercial Company」と契約販売したことで、アメリカへの販路が開かれた（1916 年の死後、彼の農園は売却され、Finca "La Bonita"に改名された）。この当時、ボルカンからボケテの一带は、コロンビア人政治家でチリキ県知事となったランバート（Juan Manuel Lambert）が私物化しており、入植者の中には彼の私有地に不法侵入した容疑で逮捕されるものも現れた。やがて入植者らはランバートの所領から外れたアルト・リノとバホ・ボケテで共同体を形成していった（※「アルト Alto /バホ Bajo」はそれぞれ「高/低」を意味し、リノ地方の高地、ボケテ地方の低地を意味する）
- 19 世紀末、棍棒外交を採っていたアメリカは、国防上の観点からもパナマ地峡を重視。その後押しでパナマがコロンビアからの独立を果たす（1903 年）。アメリカはフランス人レセップスが中断していた運河の建設権、恒久貸与権、排他的管理権を得て、パナマ運河を建設、完成させる(1914 年)
  - 1907 年、パナマの法学者で政治家、作家でもあったエウセビオ・モラレス（Eusebio Antonio Morales）がボケテ地方を訪れ、当時のコーヒー農園についての記録を残している。上記のトーマスが所有する農園を筆頭に、アメリカ人、イギリス人、ドイツ人、パナマ人が所有する農園が 40 近くあり、合計で 30 万本以上のコーヒーノキが栽培されていた。そのうち最も大きいトーマスの農園は 300 エーカー（東京ドーム 26 個分）の広さがあり、75,000 本のコーヒーノキを栽培していた。ただし収穫期の手手が足りず、多くの実が収穫出来ずに落果してしまっていたという。また二番目に大きいアメリカ人 J.F.デンハムの農園ではパルパーなど最新の機械が導入されていたこと、イギリス人ジェームズ・ローラーの農園では、単純な乾式の脱殻が行われていたことなどが記録されており、栽培・精製の方法は多様であった。
- 1911 年、アルト・リノを中心地として「ボケテ区」が行政区として正式に発足する。1916 年までに中心はバホ・ボケテに移行した。
  - 第一次世界大戦中～後（1910-20 年代）ボケテ区には鉄道や庁舎、映画館、リゾートホテルな

どが作られる。コーヒー栽培も続けられており、Ukers の "All about coffee" にもパナマコーヒーを代表するものとして、記載が見られる。

● 1929 年、世界恐慌によって各国の経済が混乱。

- コーヒー生産国では既にブラジル等で生産過剰になっていた上に、消費国経済悪化により需要が落ち込み、それまでの「作れば売れる」時代が終焉。価格が暴落、経済的な大打撃を受けた。個人農園主中心のコスタリカなどでは特に離農が顕著となり、縮小に向かう。
- パナマでは世界恐慌直後に興った、反米組織によるクーデター政権が、コーヒー農家の支援政策を実施したため、コーヒー産業の消滅を免れた。
- 1935 年、ボケテ区には二度目の移住ラッシュが到来する。コロンビア、アメリカ、中米からの移民が、肥沃な土地を求めて移住し農業に従事した。

● 第二次世界大戦 (1939-1945 年) から戦後にかけて、ボケテ区ではカーニバルやパブリックスクール、高等学校、教会、高速道路などが作られて発展した。

- 1950 年代、IICA (米州農業協力機構、1942 年設立) が中米のコーヒー生産の協力振興のために、エチオピアやケニアなどの種苗コレクションを収集。エチオピアからケニアに移入され、タンザニアなどに送られていたゲイシャもこのときコスタリカ・トゥリアルバの研究所 (CATIE) に収集された。53 年にタンザニア経由で移入されたのが最初 (T.2722 株) で、以降 54 年 (T.2917、コンゴ)、55 年 (T.3214、タンザニア)、62 年 (T.4305、マラウイ)、65 年 (T.4622、ゲイシャ地区で採取) ほか、多数の系列が収集されている。
- IICA はパナマのコーヒー栽培の実情調査も行い「パナマのコーヒー生産量は、国内消費量とほぼ同程度 (=少ない)。品種はティピカとサンラモン、およびその交配種が中心で品質は高いが生産性は低い」として、多収穫品種を導入し、生産量、輸出量を増やすことが進言された。
- パナマへのゲイシャ種の導入も、これらの流れの先にあったものと考えられる。1963 年にドンパチ・シニアがコスタリカから導入したのが、その最初である。1975-80 年にはパナマ農業開発省が T.2722 株を農家に無料配布したものが実際には普及したようだ。この 1960-80 年にかけて、パナマではコスタリカなどからゲイシャ以外にも数多くの変わり種の品種 (コラムナリス種など) が持ち込まれた。いずれにしても、やがてカツーラやカツアイなどの収穫が容易な品種が普及することでパナマの農園主たちからは忘れ去られ、またコーヒーさび病耐性についても、各国でより耐性の優れた品種が作出されたことで、ゲイシャへの関心は失われていった。

● 1956 年に、スエズ運河がエジプトに返還されたのを契機に、パナマ国内でもパナマ運河の返還をアメリカに要求する声が高まる。1964 年に運河の敷地内の高校にパナマ国旗を掲揚しようとした学生ら 20 名が米軍に射殺された事件 (国旗事件) を契機に、パナマだけでなくアメリカでも運河の返還論が議論されるようになった。

● 1967年、アメリカとパナマ政府は運河に関する新しい条約草案を発表するが、不服を唱えるトリホス将軍率いる軍部がクーデターを起こし、反米ナショナリズムの軍事政権が実権を掌握する。パナマ運河返還を強くアメリカに要求し、1999年に完全返還することを盛り込んだ新運河条約を1977年に締結した。条約締結の翌年に、トリホスはロヨ大統領に民政を移管するが、1981年に飛行機事故でトリホスが死亡し、1983年にノリエガ軍最高司令官による軍事独裁体制が政権を掌握した。

- 1970年に中南米では初めて、ブラジルでコーヒーさび病が発生する。その後南米諸国に広まり、1976年にはニカラグアでも発生、以後1984年までにはパナマを除く中米地域のすべての産地がさび病に見舞われた。この事態を受け、中米諸国はIICAと共同して、コーヒーさび病対策に対する国際会議を開催(1984-86年)した。ここで検討されたさび病のモニタリング方法や初期防除法などのため、パナマでは現在までに大規模なさび病流行は報告されていないようだ(ただし試験場での検出事例や、病原体を保菌したコーヒーノキの存在は確認されている)。その後、多くの国で耐病性のアラビカ/ロブスタ交配種を作出し、その作付けを増やした。パナマでもMIDA 96が作出されたが、さび病流行がなかったため、ほとんど実用化はされなかったようだ。このことが結果的に、他生産国で交配種の普及による香味劣化が問題視された後で、パナマの高品質さを印象づける一因になったとも考えられる。

● 1980年代の終わり頃に、パナマ国内で反ノリエガ勢力がノリエガの不正を告発し、政府から抑圧される。アメリカもノリエガを麻薬密売容疑で告発。1989年、アメリカ軍がパナマに侵攻する。1990年にノリエガ政権が崩壊し、民主化政権が確立した。この頃は米ソ冷戦が終結し、中南米諸国で民主化が進んだ時期でもあった。1999年、パナマ運河は返還された。

- 1990年、コーヒー価格の世界的な大幅下落(第一次コーヒー危機)。国際コーヒー協定(ICA)の輸出割当制度が破綻し、生産国の生豆在庫が大量に市場に流れたことで価格が急落した(ICA崩壊ショック)
- 1995年の民主化後、パナマのコーヒー農園では人件費の高騰により、生産コストが上昇した結果、国際競争力が低下したため、生産者がさらなる苦境に陥った。そこで1996年10月にボケテ区の7つの農園が共同して、高品質高価格のコーヒー生産者団体としてパナマ・スペシャルティコーヒー協会(SCAP)を発足する。

● 1999年以降、ボケテ区に三度目の移住ラッシュが到来する。豊かな自然と静かな土地柄のため、退職後のアメリカ人やカナダ人、ヨーロッパの人々が海外での余生を送るためにボケテ区への移住を行った。2001年にはAARP(全米退職者協会)の機関誌"Modern Maturity"(現AARP the Magazine)で、2005年には"Fortune"誌で、それぞれ「退職後に暮らしたい場所、世界のトップ5」の一つに選出され、移住希望者の人気を集めている。

- 生産国スペシャルティ協会の中では1999年にブラジルがCOE(Cup of Excellence)コンテスト

を行い、オークション販売を行っていたが、パナマでもそれに次いで、2001年からコンテスト&オークションを行い、「高品質高価格」販売を目指した。しかし、アメリカのケネス・デーヴィス（CoffeeReview.com の代表）は、SCAP コンテスト上位品目を Coffee Review グループ内でカップリングし、「質の高さは認めるが、エチオピアやグアテマラの良品のような個性的な魅力は少ない」とコメント。抜きん出た特徴を求めるアメリカと、繊細さを評価するパナマのカッパー間の意見の食い違いも指摘した。また、一部のものに「発酵系の香り」があることについても記述された。

- 2004年、エスメラルダ農園のゲイシャがそれまでの最高価格を更新する過去最高額で落札される。そのユニークな香味特性とともに一躍注目を浴び、個性不足と言われたパナマの「個性」をアピールすることになる。

- 2011年、ボケテ区が設立100周年を迎える。

	ボケテの歴史	パナマの歴史	コロンビアの関わり	アメリカの関わり	それ以外の国の出来事とコーヒー史
紀元前1250 -紀元前後					オルメカ文明(メキシコ湾岸部)
紀元前2900 -1300年頃		パナマ中部で最古の土器			
紀元前3世紀 -17世紀					マヤ文明(メキシコ南東部〜グアテマラ)
6世紀頃		パナマ中部でコクレ文化が繁栄。金製品や彩色土器が使われていた			
6-9世紀頃	チリキ県で、高度な彩色土器や土偶を伴う、チリキ文化が繁栄				
15世紀前半 -1521					アステカ帝国(メキシコ中央高原)
1492年				コロンブスによる新大陸発見	
1500年			スペイン人がコロンビアのカリブ海沿岸部に到達		
1501年		スペイン人がはじめてパナマ(ポルトベロ)に到達			
1508年		カステールリヤ(後のスペイン)国王が探検家ニクエサにパナマを与える			
1513年		バルボアがパナマを横断し太平洋側に到達(ヨーロッパ人による太平洋の発見)			
1519年		パナマシティの設立。			
1543年		スペイン植民地下にペルー副王領が創設。パナマ、コロンビアもここに含まれた。			
17世紀以前	チリキ県とボケテには、ンガベ族やドラスク族その他の原住民が暮らすのみだった				
17世紀	スペイン人のアメリカ侵出にともなう衝突。原住民の一部はチリキ県の森に逃れ、滅亡を免れた				
16~17世紀		交通の拠点、スペインとの交易拠点として繁栄			
17~18世紀		パナマ各地で海賊の襲撃が相次ぐ			
1671年		英海賊ヘンリー・モーガンがパナマシティを焼き討ち			
1680年		英海賊リチャード・ホーキンスがチリキ県レメジオス郊外を襲撃			
1686年		ホンジュラスから来た英海賊がチリキ県のアランヘトサンロレンソを襲って略奪			
1717年			ペルー副王領の一部(コロンビア、ベネズエラ、エクアドル)がヌエバ・グラナダ副王領として分割される		オランダが南米のスリナムにコーヒーノキを移入
1723年			ヌエバ・グラナダ副王領、資金難のため一旦廃止		ド・クレーがフランスからマルティニーク島にコーヒーノキの移入に成功
1724-1750					西インド諸島にコーヒー栽培が広がる
1727年					ブラジル・パラ州にスリナム由来のコーヒーが持ち込まれる
1730年頃			イエズス会修道士がコロンビアにコーヒーを持ち込む(が、広まらなかった?)		
1732年		ニカラグアのみスキート族がチリキ県ダヴィッドを襲撃し、焼き討ち			
1739年			ヌエバ・グラナダ副王領が再び創設。		
1750年頃					フランス領サンドマングが世界のコーヒーの半分を生産
1751年		パナマがヌエバ・グラナダ副王領に含められる。			
1750-60年代					グアテマラに西インド諸島からコーヒーノキが移入される
1773年				ボストン茶会事件	
1775-1783年				アメリカ独立戦争	
1776年頃					コスタリカにキューバからコーヒーノキが移入される
1788年頃	ボケテには、海岸付近の原住民が北に侵攻するのを監視するための駐屯地だけが合った				
1789年					フランス革命が勃発
1790年頃					メキシコに西インド諸島からコーヒーノキが移入される
1791年					サンドマングでハイチ革命が勃発(1804年にハイチ独立)
1799年					フランスでナポレオンが権力を掌握
1808年		ラテンアメリカのスペイン植民地がスペイン本国に反発し独立運動			ナポレオンがスペインブルボン朝に介入し、スペイン独立戦争に発展 フランス軍のポルトガル侵攻によりポルトガル王朝がブラジルに遷都
1820年		コスタリカ産のコーヒーがパナマシティに運ばれ輸出される			
1821年			大コロンビアの一部としてスペインから独立		
1831年			大コロンビアが分離し、ヌエバ・グラナダ共和国の一部に再編される		
1833年					エルサルバドルにグアテマラからコーヒーノキが移入される
1835年			コロンビアから初めてコーヒーが輸出される		
1840年代~					ブラジルのリオデジャネイロでコーヒー栽培が拡大。最大の生産国に成長。
1846年			アメリカがパナマ地峡の横断権を獲得		
1848年		バシフィック・メイル社がパナマシティとアメリカ西岸を結ぶ船便を出す		カリフォルニア・ゴールドラッシュが始まる	
1852年頃	カリフォルニアのゴールドラッシュで、アメリカ東部から西部に向かうためパナマに立ち寄った人々が船を待つ間、チリキ県の肥沃な土地で農園を始める。				
1855年		パナマ地峡横断鉄道が完成			
1859年					ブラジルにレユニオン島のブルボンが持ち込まれる
19世紀中頃~	ボケテ周辺にまで農園が広がる				
1860年代~					東インドでコーヒーさび病が大流行
1861年					コーヒーさび病がケニアで発見される
1863年		コロンビア合衆国(自由主義性が強まる)が成立。パナマは自治州の一つになる			
1868年					Welter "Essai sur l'histoire du café" (パナマの記載はなし)
1873年	ボケテ西部のカジャホンセコ地区をセラシン家が開墾				
1878年					Madriz & Casoria "Cultivo del café. Panama" (パナマでの栽培を提案)
1880年頃から			保守派ヌエサがコロンビア合衆国大統領就任、ククタでのコーヒー栽培が主産業に発達		
1881-1889		フランス人技師レセップスがパナマ運河建設に取り組み			

	ボケテの歴史	パナマの歴史	コロンビアの関わり	アメリカの関わり	それ以外の国の出来事とコーヒー史
1886年			コロンビア共和国(保守派寄り、中央集権性が強まる)が成立		
19世紀末 ~20世紀初頭	コロンビア人政治家のランバート(1903年、チリキ県知事)が、ボルカン〜ボケテの一角を自分の農園として私物化				
1895年頃	ボケテ地区アルト・リノに最初の入植者が入る。居住地東のアルコイリスにコーヒー農園を拓く。				
1895-1916年	カリフォルニアのJ.R.トーマスが妻と共にボケテに移住し、アルト・リノのサンタマリア農園を経営。シカゴの会社「Boquete coffee and commercial company」と契約し、ボケテのコーヒーを販売(1916の死去後、農園はスイス人に売却され、「La Bonita」に改名)				
1898年				米西戦争。中米の運河の必要性がアメリカ国内に浸透	
1899-1902			千日戦争(コロンビア保守派、自由派対立による内戦)		
20世紀初頭	ボケテに入植した者がランバートの農園に不法侵入した容疑で逮捕される。ランバート領外のアルト・リノとバボ・ボケテの二カ所に入植者が集まる				
1901年				セオドア・ルーズベルトが大統領就任、棍棒外交を推進。	
1902年				アメリカ議会がパナマ運河建設の権利獲得する法案(スプーナー法)を採択	
1903年		アメリカの支援を受けて、パナマがコロンビアから独立	パナマがコロンビアから独立	独立直後、パナマ運河建設権、永久租借権、排他的管理権をアメリカが獲得	
1907年	アルト・リノにカトリック教会が建設される  ボケテのコーヒー栽培に関する記録:ボケテの主要な農産物であり、全体で30万本のコーヒーノキが栽培。収穫の人手が不足、バルバーを導入している農園もあった。				
1903-1914		パナマ運河の建設			
1911年	リノ地方を中心として「ボケテ区」が設立(1916年までにバボ・ボケテに中心が移転)				
1912-1916	ダヴィッドとボケテ間にチリキ鉄道が建設される				
1914-1918					
1922年					Ukers「All about coffee」初版。パナマ/チリキ県・ボケテの記載あり。「国内消費のみで、海外では無名。標準的な大きさの緑色の豆で、どっしりしたコクと強い香り。ボケテ産が良品」
1925年	ボケテに映画館が建てられる				
1928年	ダヴィッドにリンドバークが着陸、ボケテにも来訪。  バナモンテ・イン&スバが開業				
1929年					世界恐慌。生産過多気味だったコーヒーの価格暴落が決定的になり、ブラジル、コスタリカはじめ生産国に大きな経済被害
1931年		アルヌルフォ・アリアス率いる反米組織「共同運動」がクーデターにより政権を奪取			ケニアでゲイシャを含むエチオピア野生種が収集される
1932年		アルモディオ・アリアス(アルヌルフォの兄)が大統領就任			
1932-1933	コーヒー価格暴落と生産不安定により、多くの農園主が負債を抱え、コーヒー生産が深刻な打撃を受ける。	コーヒー生産の安定のため、国立銀行がコーヒーを担保に生産者に貸付を行い、仲買抜きで直接販売する協定を締結			
1933年				フランクリン・ルーズベルトが大統領就任、善隣外交を推進。	
1934-35	ボケテの住民がいバナモンテにカフェを作ってコーヒーを販売するが、翌年撤退				
1935年	ボケテへの移住ラッシュ。コロンビア、アメリカ、中米から豊かな自然と肥沃な土地に惹かれて移住。			サンディエゴで、カリフォルニア太平洋博覧会が開催される	Ukers「All about coffee」第二版。パナマ/チリキ県・ボケテとボルカンの記載。「国内消費用、ノルウェー、デンマーク、スウェーデン向けに少量輸出。良い大きさの緑色の豆で、どっしりしたコクと強い香り。ボケテ産が良品」
1936年	ボケテのコーヒー100ポンドが金5ドルで取引される				
1939-1945					第二次世界大戦
1940年		アルヌルフォ・アリアスが大統領就任し、反米路線が強まる			
1941年	ボケテでカーニバルが始められる  「クラブ・ボケテ」が開業	アルヌルフォ、国家警備隊により追放されキューバへ亡命。 デ・ラ・グアルディアが大統領就任し、アメリカへの運河地域外の基地貸与を承認			
1942年		第二次世界大戦に連合国側として参戦			IICA(米州農業協力機構)設立
1946年	ボケテにバプテックスクールが建設される				
1947年		アメリカ、運河地域外の基地から撤退			
1949年	ボケテに高速道路が開通				
1950年	バプテックススクールで、第一回「花とコーヒーフェア」が開催される				
1952年	ニコソン大統領がボケテを来訪。  最初の高等学校が創設。  イタリアから来たフランシスカン(Franciscan)兄弟が教会を完成させる				
1953年	カウギル(Cowgill)がパナマ各地のコーヒー栽培の実情を調査。「生産量は国内消費量と同程度、栽培されているのはすべてティピカとサンラモン、または両者の交雑種で、生産方法は多様。品質は高く、病虫害も少ない。今後は多収穫品種の導入と、輸出を視野に入れるべき」				IICAのプロジェクトにより、ゲイシャを含むケニアのコレクションがコスタリカに収集される
1956年					エジプトがスエズ運河を国有化
1962年	イングリッド・バークマンがいバナモンテホテルに宿泊				国際コーヒー協定(ICA)が成立
1963年	フランシスコ・セラシ(ドンパチーシニア)がコスタリカからゲイシャ種を移入				国際コーヒー機関(ICO)が発足
1964年		運河地域の高校にパナマ国旗を掲げようとした学生20数名を米軍が射殺(国旗事件)		国旗事件を機にアメリカ世論もパナマへの運河返還論が高まる	
1967年			パナマ、アメリカ間で、新運河条約草案が発表される		
1968年	トリホス政権下でボケテの活動が停止	新運河条約草案に反対するトリホス将軍らがクーデター。国家警備隊が政権を掌握			
1970年					ブラジルでコーヒーさび病が発生

	ボケテの歴史	パナマの歴史	コロンビアの関わり	アメリカの関わり	それ以外の国の出来事とコーヒー史
1973年		パナマでの国連安保理で、パナマ運河の返還が提案される(アメリカの拒否権発動で否決)			
1975-80年	パナマ農業開発省が農民にゲイシャ種(T.2722株)を無料で配布。				
1976年					ニカラグアでコーヒーさび病発生
1977年			パナマ、アメリカ間で新運河条約が結ばれる		
1979年					エルサルバドルでさび病発生
1980年					グアテマラ、ホンジュラスでさび病発生
1981年		トリホスが飛行機事故で死亡。政権が不安定化			エクアドル、メキシコでさび病発生
1982年				SCAA発足	
1983年		ノリエガが最高司令官となり、国家警備隊を国家防衛軍に改編。			コスタリカ、コロンビアでさび病発生
1984年		パナマ県の国立植物防衛機関で、コーヒーさび病が見つかる			中米諸国が、さび病対策に関する第一回会合を開催
1987年					SCAJの前身、全日本グルメコーヒー協会が発足
1988年		ノリエガ司令官と反ノリエガの民主化勢力の対立で政局が混乱。パナマが国際的に孤立		フロリダ大陪審が麻薬密売容疑でノリエガを告発。 アメリカでも反ノリエガ運動が激化	
1989年			アメリカのパナマ侵攻		米ソ冷戦の終結
1989-93年					第一次コーヒー危機(IGA崩壊ショックによる)
1990年		ノリエガ政権が崩壊し、民主化政権が確立			
1991年					ブラジルスペシャルティコーヒー協会が発足
1994年	チリキ州出身のベレス・パンジャダレスが大統領に就任。ボケテの高速道路やスタジアムなどを整備				
1995年		人件費の高騰からパナマコーヒーの生産コストが上昇、国際競争力が低下。生産者は悲観的な状況。主な輸出先はアメリカ、ドイツ、カナダ			
1996年		SCAP(Specialty Coffee Association of Panama) 発足			
1999-03年					第二次コーヒー危機(ベトナム・ブラジルの増産による)
1999年	ボケテへの移住ラッシュが起きる。アメリカの退職者やカナダ人、ヨーロッパ人が、風光明媚なボケテに惹かれて移住。		パナマ運河の返還		ブラジルでCOEコンテスト&オークションが始まる
2001年	AARP(全米退職者協会)の機関誌"Modern Maturity"(現AARP the Magazine)で、「退職後に暮らしたい場所世界トップ5」の一つにボケテが選ばれる。	パナマでCOEコンテスト&オークション開始	ケネス・デーヴィス(Kenneth Davids: "Coffee Review"の代表)がTea & Coffee Trade Journalに"The Panama coffee dilemma"で、1999/2000のSCAPで上位獲得したコーヒーのCoffee Review側のカップリングの結果を発表。カップリングスコアは高いが特徴的な個性に欠け、「ソフトで甘いのか、当たり障りなく平坦なのか」「バランスが取れているのか、退屈なのか」「繊細なのか特徴が弱いのか」等で、カップラー間の評価(特にSCAPとCoffeeReviewのカップラー同士)には食い違いが見られた。主な栽培品種はカトゥーラ、カツアイで、ティピカ、ブルボンはずか。		
2002年				非営利組織、Alliance For Coffee Excellence Inc.設立、COEを運営へ	
2003年		コンテストが「ベスト・オブ・パナマ」に			
2004年	エスメラルダ農園のゲイシャが過去最高額で落札。二種注目を浴びる。				
2005年	"Fortune"誌の「退職後に暮らしたい場所世界トップ5」の一つにボケテが選ばれる。				
2008年		エスメラルダ・スペシャルがベスト・オブ・パナマと独立のオークションとして開催される		ミッシェル・ワイスマン(Michele Weissman)が"God in a cup"を執筆	
2011年	ボケテ設立100周年				

出典 Heidke, D. "The Boquete (Not For Tourists) Handbook", Kindle e-Book (retrieved via google), 2010

増田義郎・山田睦男編『新版世界各国史25 ラテン・アメリカ史I メキシコ・中央アメリカ・カリブ海』山川出版社 2000年

増田義郎編『新版世界各国史26 ラテン・アメリカ史II 南アメリカ』山川出版社 2000年

Luxner, L. Central America: coffee industry; Panama. Tea & Coffee Trade Journal 167(1):24-29. 1995

Davids, K. The Panama coffee dilemma. Tea and Coffee Trade Journal 173(2):35-41. 2001.

Fulton, R. H. "Coffee rust in the Americas", The American phytopathological society. 1984

Ukers, W. H. "All about coffee" (1st ed), The Tea and Coffee Trade Journal Co, 1922

Ukers, W. H. "All about coffee" (2nd ed), The Tea and Coffee Trade Journal Co, 1935

Welter, H. "Essai sur l'Histoire du Café", (retrieved via google), 1868

Morales, E. A. "Ensayos, documentos y discursos", Autoridad del Canal de Panamá. 1999

Araúz, A. M. "El café Geisha de Panama rompe record mundial", 2006, <http://orton.catie.ac.cr/repdoc/A4506E/A4506E.PDF>

"Chiriqui province:History" <http://www.lonelyplanet.com/panama/chiriqui-province/history>

"Specialty Coffee Association of Panama" <http://scap-panama.com/>

[http://en.wikipedia.org/wiki/History\\_of\\_Panama](http://en.wikipedia.org/wiki/History_of_Panama) 2012年5月1日確認

<http://ja.wikipedia.org/wiki/パナマの歴史> 2012年5月1日確認



2012/5/20 コーヒーセミナー「パナマゲイシャの多様性と可能性」参考資料  
パナマとパナマコーヒーの歴史（概観）

著者 旦部幸博

2012年5月2日初版作成

2012年5月23日改訂

この文書はクリエイティブ・コモンズ・ライセンス 表示 - 非営利 - 改変禁止 3.0 非移植 の下に提供されています。このライセンスのコピーを見るためには、<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/> をご覧になるか、以下へお手紙をお送り下さい： Creative Commons, 444 Castro Street, Suite 900, Mountain View, California, 94041, USA.

